

氏名	山 田 恵 介		
授与した学位	博	士	
専攻分野の名称	医	学	
学位授与番号	博乙第2938号		
学位授与の日付	平成7年12月31日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)		
学位論文題目	抗痙攣剤の骨代謝に及ぼす影響の検討		
論文審査委員	教授 井上 一	教授 岡 鎭次	教授 庄盛 敏廉

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

抗痙攣剤を1年以上服用中の外来てんかん患児のうち痙攣のコントロールは良好で、運動能力に制限はなく同程度で、その差による骨への影響は無視でき、また知能障害、日光照射不足、低栄養、腸管麻痺のない普通の日常生活をしている5～11歳、平均8歳9カ月の59名（男児35名、女児24名）を対象に抗痙攣剤の骨代謝に及ぼす影響を検討した。

1. computed X-ray densitometry法により対象の11.9%の児に骨密度の低下が認められたが、骨密度低下はすべてsubclinicalなものであった。
2. 年齢が10歳以上、抗痙攣剤の服用開始年齢が4歳以上、服用期間が7年以上、服用薬剤がPhenobarbital単剤である児に骨密度の低下が多く認められた。
3. 骨密度低下群の血清カルシウム、リン、25-hydroxyvitamin Dは正常群のそれに比して低値であったが、いずれも正常範囲内であった。血清intact osteocalcinは高値で、抗痙攣剤の服用により骨の代謝回転が亢進していた。骨密度低下群の中に骨代謝回転の亢進が著明であった2名の女児が認められ、血清intact osteocalcinの上昇が抗痙攣剤による骨代謝障害の成因や病態と密接に関係していることが示唆された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、抗痙攣剤を1年以上服用中のてんかん患児を対象として、抗痙攣剤の骨代謝に及ぼす影響をcomputed x-ray densitometry法で研究したものである。対象の11.9%の児に骨密度の低下を認め、年齢が10歳以上、服用開始年齢が4歳以上、服用期間が7年以上、フェノバルビタール単剤である児に骨密度低下が多いことを明らかにした。また、この骨密度低下は高代謝回転型であることを示した。これらは重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。